



滑らかな指さばきで演奏する山館さん

輝いています

ひと

オーボエ奏者

やま だて あに も
山館 兄孟 さん

直接心に届く演奏を

世界で最も難しい木管楽器としてギネスに認定されているオーボエ。この楽器を自在に操り、伸びやかな美しい音色で聴く人を魅了し続けている山館兄孟さん（24歳・北町2丁目）は、今年3日に下蔵公民館の「さくらコンサート」に出演します。

息が入る空間が非常に狭く、繊細な楽器であるオーボエに初めは苦戦するも、猛特訓を重ね実力を付けていき、武蔵野音楽大学に進学。NHK交響楽団の首席オーボエ奏者の青山聖樹氏らに師事しながら表現力に磨きをかけ、同大学の吹奏楽団「ウインドアンサンブル」の一員として世界最高峰の吹奏楽の祭典「ミッドウエスト・クリニック（シカゴ）」に出演するなど、大舞台での経験を数多く積みました。

その一方、地元の下蔵でも「チェンバーオーケストラ蔵」のコンサートをはじめ、各所で演奏を披露してきた山館さん。市内では初となる、自身のソロとピアノとのデュオによる冒頭のコンサートについては、「緊張感もありつつとても楽しみです。オーボエを通して音楽の魅力を伝えられたら」と、意気込みを語ります。

この春、山館さんは大学院を卒業し、プロオーケストラ奏者の育成機関「桐朋オーケストラ・アカデミー」で演奏家としての新たな一歩を踏み出します。「音色だけでなく、表現力も一流を目指したい」。その眼差しは、まっすぐに未来の自分の姿を捉えています。

今月の河鍋暁斎記念美術館

天才絵師の作品 蔵にあり

— No.34 —



暁斎筆「萬年豊作おどり」大判錦絵三枚続

殿様やお姫様など身分が高そうな人々から坊主に山伏、果ては力士や遊女など、実にさまざまな人物が、同じ扇子を手に踊りに興じています。中央には大きな朝日と松、その下には「天下泰平」の額が掛かっています。一見するとめでたい場面のように

ですが、この作品が出板された慶応元年（1865）は米価が高騰して各地で一揆が起こり、2、3年後には実際にこの絵のように仮装をした集団が練り踊る「ええじゃないか」が発生します。中央の下部に書かれた「盤石」という赤い文字が皮肉に映る、暁斎ならではの風刺画です。



現在の茨城県古河市に生まれる。浮世絵や狩野派を学び、江戸・東京の庶民から人気を博す。明治9年、万国博覧会に肉筆画を出品。14年、内国勲業博覧会で日本画の最高賞受賞。娘の暁翠も日本画家。



かわなべ きょうさい
河鍋 暁斎
天保2年(1831)
～明治22年(1889)

河鍋暁斎記念美術館 3月1日(金)～4月24日(水)

「暁斎の戯画に見る風刺と反骨」展 同時開催
「暁斎プラスワンシリーズ29 野坂稔和 波の戯画展Part.3」展

開館＝午前10時～午後4時 休館＝木曜日・毎月26日～末日
ところ＝南町4-36-4 入館料＝一般600円 65歳以上500円
高校生・大学生500円 小・中学生以下300円 ※65歳以上の人は年齢の分かる物、学生は学生証をご提示ください。
詳細＝同館 ☎441-9780
(20人以上の団体は要予約)



展覧会の詳しい内容は美術館のホームページをご参照ください

